旧制松江高等学校教師

カルシュの足跡を追って

◇25◇

若松　秀俊

神社や寺院で仲良く遊ぶ

子どもたち（上）

松江の奥谷町で生まれたカルシュの長女メヒテルトは五、六歳のころ、毎日夕方三時になるとカラスに会いに、近くの神社や寺院に出掛けたものだった。とくに、エレーナ（ウッドマン家の二女）と、仲良しの史（ふみ）と手をつないで、歌をうたいながら行くことが多かった。

奥谷の官舎から北に少し歩くと、豊かな森や竹やぶがある。今も千手院や春日神社を囲んで、明るい木立が目に入る静かなところである。史は春日神社の近くに住んでいた。メヒテルトは今も鮮明に、少女時代の体験を感慨深く思い出す。

彼女は学校から帰った近所の子どもらとも連れだって、あたりをひと回りしてくる。毎日のように神社に現れるお客さんのカラスに会いに行く。みんな、カラスが現れるころ合いを知っている。カラスもこれらのかわいい友達と会うのを楽しみにしている。カラスが飛んで来ては、虫をついばむのだ。

落ち着いた生活の中で、この娘たちは、ラフカディオ・ハーンが発見した神々の国の残像を感じながら、静けさを満喫していた。子どもたちは周辺の雰囲気と自然を的確にとらえていた。

日が沈むと、また手をつないで「夕焼けこやけ」の歌をみんなで口ずさみながら、カラスと一緒に家路を急いだ。不穏な世の中の様子をよそに、アメリカとドイツと日本が、子どもたちの小さな手によって、しっかりと結ばれていた。子どもが帰った後はもう家々の明かりが灯り、どの家も夕食の時を迎えるころである。

魚屋の娘の西村チヨ子が「あそばや」といって、よく誘いに来た。彼女も遊び仲間であったが一九三八年に亡くなったという。官舎のすぐ裏の家に四歳年上の神田（高橋）トシ子、三歳年上の高畠キミ子がいた。二歳年下の史とも、かくれんぼ、ままごと、人形あそび、かけっこをして遊んだ。瞼（まぶた）を閉じて当時のことを思い出しながら、斜め向かいの渡部愛之助の家のことも話してくれた。その娘にあたるのが紀代子であることは既に述べた。

なお、一九三七（昭和十二）年の復活祭期間中の三月二十八日、火災に遭遇したウッドマンは一九三三年四月から四二年三月まで日本に滞在し、同じ旧制松江高校で英語教育に携わったが、戦争のために米国に強制送還された。彼の妻ヒデは日本人で、モニカとエレーナの二人の娘がいた。

ところで、奥谷の入り口の桑原商店には、四角い大きな食パンが置いてあった。子どもたちは、食パンは異人さんの食べ物だと思っていた。一般の人々にとっては、パンはあんパン、張り込んでやっとジャムパン、クリームパンであったころの話だ。

京店のまつ屋に行くとシュークリームが売られていた。子どもたちは一度食べてみたいなと、ため息をついていた。とにかく、すごいごちそうに見えた。桑原商店には高級なアイスクリームもあった。だから「おれ、きのうアイスクリームを食べたで」という具合いに、子どもは自慢げに言ったものだった。

たいていの子どもは自転車に旗を立ててくる「アイスクリン」しか知らなかった。そんな時代であった。

（東京医科歯科大学大学院教授）

＝文中敬称略＝

後列右からメヒテルト、高橋英語教授の娘トシ子、永田家三教練講師の娘フミ子。前列は右から東（小豆沢）史、高畠ドイツ語教授の娘キミ子